

2021年12月12日 待降節第3主日礼拝メッセージ

「荒れ野からの声」

水谷憲牧師

聖書 マルコによる福音書 1章 1-8節

12月も第3週に入りまして、町の明かりも音楽も、一般の家庭のイルミネーションも、すっかりクリスマスっぽくなってきて、よっぽどキリスト教会の方がクリスマスを迎える準備が地味な気がするくらいです。いよいよクリスマスが近づいておる中で、みなさんそれぞれもクリスマスを迎える備えとしてのアドベントの歩みを進めておられることと思います。そういえばかなり昔、電車に乗っていて、扉の横に貼ってあった広告を眺めていたら、何やら「クリスマスまでにはお肌をスベスベに!」といったエステか何かの広告があったんです。「へえー」と通り過ぎてしまいそうになりましたが、しかしふと「何でクリスマスまでに肌スベスベにしとかなあかんねん?」。妄想をふくらますのはもうそれ以上は止めといたんですが、アドベント、すなわちクリスマスを迎える準備ってというのは、少なくともそんなんじゃないだろうと。もちろん、「アドベント」というものの認識が世間様にどれだけ浸透しているのかはわかりません。今が「アドベント」という期間だということも、そんなに知られてはいないのかもかもしれません。ただ、遊園地みたいなギンギンのイルミネーションを飾りつけることや、子どもへのプレゼントに頭を悩ませることとか、あるいはイヴに向けてお肌の手入れやムダ毛処理とか、そりゃあ別にやってだめなことではないけども、それは本当に大事なことじゃないよね、っていうことを、少なくとも教会につながっている私たちは再確認しておけたらなあと思います。

さて今日は、日本基督教団の定める聖書日課に従いましてマルコによる福音書の冒頭部分をお読みいたしました。せっかく来週はもうクリスマスだというのに、あまりクリスマスと関係のなさそうな箇所であるように感じます。このマルコ福音書は、マタイ福音書やルカ福音書のようなイエス・キリストの誕生物語には一切触れることなく、いきなり洗礼者ヨハネの登場から始まっています。それは、このマルコ福音書がイエス・キリストの生涯を伝えている4つの福音書の中で、一番最初に書かれたものだからかもしれません。きっとこれを書いたマルコは、イエス・キリストが私たちの救い主だった、神の子だったということはぜひとも伝えなかったのだけれども、何もイエスが誕生した時にまでさかのぼって物語として書き残す必要は感じて

いなかったのかもしれない。そのための資料も持ちあわせていなかったでしょう。ですから、今日のこのマルコ福音書にはイエス・キリストの誕生にまつわる物語、羊飼いの話や外国の博士たちの話もないし、それに先立つ天使のお告げなどの話なんかも一切ないわけです。しかし今日の箇所において、洗礼者ヨハネが「私よりも優れた方が、後から来られるのだ」と救い主キリストの到来を預言し、人々に悔い改めの洗礼を授けていたわけですが、それは、初めのイザヤの預言にあるように、救い主の来られる道を少しでも整えておこうという備えの行為であって、救い主をお迎えする、そのための準備をして待ち望むという意味では、私たちのアドベントの歩みとも繋がるものである気がします。つまり、今日の箇所も、ちょっと違った切り口だけど、ちゃんとアドベントの記事であるのだと理解することができるわけです。

この洗礼者ヨハネが人々に示したアドベントの歩み、すなわち救い主をお迎えする準備とは、救い主によって罪を赦していただくための「悔い改めの洗礼」でありました。マタイ福音書によると、洗礼者ヨハネはファリサイ派やサドカイ派の人々が大勢、洗礼を受けに来たのを見て、「蝮の子らよ、差し迫った神の怒りを免れると、誰が教えたのか。悔い改めにふさわしい実を結べ。『我々の父はアブラハムだ』などと思ってもみるな。言うておくが、神はこんな石からでも、アブラハムの子たちを造り出すことがおできになる。斧は既に木の根元に置かれている。良い実を結ばない木はみな、切り倒されて火に投げ込まれる」と言っています。これは非常に厳しい言葉ですね。洗礼者ヨハネはきっと私たちにも同じことを言うでしょう。キリスト者だからといって必ずしも神の怒りを免れると思うな、悔い改めにふさわしい実を結ばなければ、神によって火に投げ込まれるのだと。そない怒らんでも、という気もしますが、でも確かにその通りです。私たちはキリスト者だからといって、あるいはキリスト者になったからといって、罪を犯さなくなったわけではないからです。

これは何度かお話ししていることかもしれませんが、ローマ・カトリックにおいて、「七つの悪徳」または「七つの罪源」と呼ばれるものが挙げられています。それは、道徳性の観点から見て特に重大な結果をもたらす7つの罪のことで、傲慢・貪欲・情欲・貪食・嫉妬・憤怒・怠惰となっています。私たちプロテスタント教会ではあまりその「7つの悪徳」については声高には言われませんが、しかしそれは私たちが、教会に集い、イエスに従う者となっているために、もはやその7つの罪から解放されているからというわけではないのです。もちろん私たちキリスト者は、

本来ならばその7つの罪から解放されているはず、自由になっているはずなのですが、現実には相変わらず罪に付きまといわれてしまっている状態であるわけです。「傲慢」とは、思い上がって横柄なこと、また人を見下して礼を欠くことをいいます。私たちにそんな無礼なことを誰かに対してしてしまった苦い経験はなかったでしょうか。「貪欲」とは、次々と欲を出していつまでも満足しないこと、いわゆる欲張りなことです。人間の欲望にはきりがありません。「情欲」とは、何かに執着したりする世俗的な欲望のことで、特に男女間の肉体的な欲望のことを言います。クリスマスイヴを「聖なる夜」とか言って目を輝かしておってはいけません。「貪食」とは、むさぼり食うこと、「嫉妬」は人の愛情が自分ではなく他の人に向くことを悔しく思うこと、または優れた賜物を持つ人に対して抱く妬みの気持ちであります。ああオレはだめだ、うまくやっているあいつがうらやましいって、さっきの「傲慢」とは反対の方向にも、人と自分とを比べてしまうことってありますよね。「憤怒」とは、怒り狂うこと。最近ほらわた煮えくりかえったりしたことはありませんか。怒り散らして周りの人々を不快にしてしまうこと、ありますよね。「怠惰」は怠けてだらしないこと。ちょっとゆるいくらいならまだしも、だらしなさにも限度があります。さて、この7つの悪徳について全く心当たりがないという人、「いや一別にないなあー」って、素直に手を上げられる人って、いるんでしょうか。そんな人、この広い世界を見渡してもほとんどいないのではないのでしょうか。

でももしかすると中には、自分を厳しく律することのできる、修行僧のようなりっぱな方もおられるかもしれません。洗礼者ヨハネ——らくだの毛衣を着て、腰に革の帯を締め、いなごと野蜜を食べていたという彼も、立派な人だったでしょう。しかし、そのように仮に自己管理がしっかりできている人であったとしても、それだけではまだ罪から逃れることができたとはいえないのです。ヨハネも言っています。「私よりも優れた方が、後から来られる。私は、かがんでその方の履物のひもを解く値打ちもない」。私なんてまだまだだと。

聖書のいう「罪」とは、それぞれ一つ一つの罪の行為だけを意味するのではなく、神様に背を向け、神様から離れ、神様に敵対している、そういう心の状態をも意味するものだからです。イエス・キリストは、神様に対して私たちが守るべき最も大事な約束は何だと言っておられたのでしょうか。「神を愛し、隣人を自分のように愛する」ことだと言っておられたはずで、たとえ仮に私たちが自分の心から生まれる様々な欲望を厳しく律することができていたとしても、追い剥ぎにあって倒れて

いる人を見ても、見て見ぬ振りをして通り過ぎる祭司やレビ人になってしまっているのは、それは隣人に対する愛を私たちに求めておられる神様に背を向けていることになっているのだ。つまり、例えば常に貪欲・嫉妬などの欲望を抑えることができている、傲慢に人を見下したりしているわけではなかったとしても、他者との係わり合いを避け、無関心を決め込んでしまうことも「罪」なのです。「罪」はギリシア語で「ハマルティア」と言います。罪にハマルティア、なんて駄洒落のようですが、それは「的をはずす」ということに語源があります。私たちが神様のねらい・神様の願いとは異なる方向へ歩んでしまった時、私たちは罪にはまってしまっているのです。

だからきっと洗礼者ヨハネは、人々に少々脅迫めいた形ながら、悔い改めを促したのです。「悔い改め」とは、ただ罪を悔いて悲しむというだけではなく、新しく心を入れ替えて神様の御心に立ちかえることを言います。それは、私たちの生き方の全面的な方向転換を意味する。そして私たちがこのアドベントの時期、改めてそれぞれの生き方を神様が本来示されておる方向へ転換することを決意する時、そこにきっと、来るべき救い主イエス・キリストは私たちに罪の赦しと、私たちのそのような決意に対する助けを与えて下さることでしょう。悔い改めとは言っても、私たちは何度となく同じ罪を犯してしまい、どうしても罪から完全に逃れることはできない、しょもない者です。そのような私たちですけど、しかし私たちがそのように弱い者であるということは神様は既に知って下さっている。大事なことは、今度こそ私は神様の示される方向へと歩みを転換するのだという「今度こそは」という決意なのです。ですから、ヨハネの「蝮の子らよ」というこの荒れ野からの声は厳しく耳が痛いものですが、その声により「神様の怒りが私たちに下る〜!」と恐れを抱くのではなく、「来るべき救い主キリストの目にかなうように、歩みを転換してキリストをお迎えしよう!」という励ましの声としてこれを受け取り、救い主が私のところにもきっと来てくださるという希望を持って、悔い改めを、小さなことからでもいい、確実にしていきたいと思っています。

クリスマスは、イエス・キリストによる福音の出発点です。神の子イエス・キリストの福音の初めが、今年もまたもうすぐやってきます。私たちめいめいがおのれの姿を振り返り、再びその歩みを悔い改めることで主の道を整えて、恐れることなく喜びを持ってキリストをお迎えしたいものだと思います。